テルアビブからテヘランへ　憎しみを超えた演奏会 （鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2017/7/18 6:30 | 日本経済新聞　電子版

ラヴェンナ音楽祭にて、テヘランのオークストラとケルビーニ管弦楽団との合同演奏会。指揮はリッカルド・ムーティ（c）Silvia Lelli

「昨年末に80周年の記念ということで、イスラエル・フィルをテルアビブで指揮をしたのだけど、つい先日、テヘランに行ってきた。テヘランのオーケストラとケルビーニ管弦楽団の合同のオーケストラをつくり、そのコンサートを指揮した。そもそもイスラエルからすぐにイランへ、というのも常識外れと言われそうだけど、音楽だから、複雑で超えられない壁を超えることができる。ただし、疲れたね。イランでクラシック音楽のコンサートを開くことについては、反対する政府の方もいて、なかなか大変で、公演の10日ほど前にやっとOKが出るような状況だった。5日間ほどテヘランに滞在して練習とコンサートを実現できた。テヘランとイタリアの演奏家が一体となったオーケストラと、ヴェルディを演奏できたのは、ほんとうに良かった」「常識を越えたのですね。お疲れでしょう」「勝手が違うから疲れたけれど、難しいと思われることも実現する」

■ラヴェンナでの演奏会

イスラエルで演奏会をして、間もない時期にイランで演奏会をするなんて常識では考えにくいことだが、大巨匠リッカルド・ムーティさんだからこそ、あらゆる障害を越えられるのだろう。テヘランに、西洋音楽のオーケストラが存在すること自体、あまり知られていない。海外の事情については、日本のマスメディアの細切れの情報から得るイメージが先行して、どこまで理解されているのか怪しいものだ。それでも、実際にテヘランやラヴェンナで、ヒジャブを被った女性がオーケストラの楽員やコーラスの歌手として、イタリアの演奏家と同じ舞台で演奏する場に遭遇すると、驚くほかない。ムーティさんの力があるにしろ、演奏は、まさにヴェルディなのである。「ナブッコ」や「マクベス」「運命の力」等々、ヴェルディのオペラのドラマチックな演奏を聴いているうちに、ついつい、核をめぐるイラン、イスラエル、米国の深刻な関係を忘れてしまった。

テヘランの演奏家とイタリアの演奏家（c）Silvia Lelli

ミラノでひと仕事終えて、ラヴェンナに寄る。ここ10年ほど、同じような旅程で、2日ほどラヴェンナで駆け足の時を過ごす。ムーティさんとの付き合いは、12年ほど前に、私が主宰をしている「東京・春・音楽祭」でヴェルディの「レクイエム」を演奏して頂いて以来である。何度か、春の音楽祭で演奏をして頂くなど、大切な友人になってしまった。毎夏、ムーティさんの奥様であるクリスティーナさんが主宰しているラヴェンナ音楽祭に顔を出して演奏会を聴き、ムーティご夫妻などと食卓を囲むのが、私にとって一つの年中行事となっている。クリスティーナさんが育ったラヴェンナは、ボローニャから電車で1時間ほど、ヴェネチアに近く、世界遺産となっている海沿いの小さな町である。夏の昼間は、古い町並みに人気がなく、城門から旧市街に入ると、古い歴史が蓄積された風景になる。紺青の空が広がり、強烈な陽射しが痛みを残すほどの強い光で肌を刺す。長い歴史の時間がひっそりと眠り続ける美しい街である。ビザンティン文化の影響が遺跡に残り、その粋ともいえるモザイク芸術では、サン・ヴィターレ寺院がよく知られている。ダンテの墓があり、かつては法王庁が所在していた地でもある。イタリア・ルネサンスに至る時代、ラヴェンナは政治的にも重要な地だったのである。

演奏会の後、会場の前に広がる大きな空間で、イランの方々と地元ラヴェンナの人々による着席スタイルの野外パーティがあった。私のテーブルには、ミラノ駐在のイラン政府の方々もいた。控えめで気品のある政府要人の奥様と長い会話をする。

「テヘランのオーケストラも、ホメイニ革命以後は、演奏を禁じられていた時期もあって、こうして、ムーティさんにイランまで来て演奏して頂いたり、イタリアで一緒に演奏ができたり、感慨深いです。私も、子供の頃からピアノを習っていたのですが、弾かなくなって長いですね。まだまだ、西洋音楽に対して、反対する人も多いのですが、イランは大きく変わってきました。娘もパリに住んで、文化関係の仕事をしています。イスラムということで、海外の方は、アラブとイランを一緒くたにされてしまうことが多いのですが、その歴史から文化は違うのですが」「日本ですと、ペルシャといえば、その違いは分かりやすいのですが、イランというと、イスラムや石油のイメージが強くて、一般の人は、混同してしまいますね。日本でもペルシャの詩や詩人を

知る人は多いし、ペルシャという言葉に魅惑される人も多いですよ。ペルシャよりイランの方が古くからある名称のようですね」

ラヴェンナのサンヴィターレ寺院

要人であるご主人が、「鈴木さん、ぜひテヘランに寄ってくださいよ。ほんとうに変わりつつありますから」と誘ってくれる。イランとはMVNO（仮想移動体通信事業者）の仕組みを導入しようかという話もあったのだか、中断をしたままである。「できること、できないことはあるけれど、ともかく、イランに来てください。お待ちしていますよ」と。

■ペルシャへの憧憬

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

「絶世の美女がここにいる。ひとりの男が夢中になって恋し、憧れている。つまり彼女の美しさを讃えている。だが、本当はその女性を讃えているのではない。美しいその女の人を通じて美そのものを讃えているのだ、というプラトニズム。ペルシャの文学によく出てくるテーマです。すべて世の中にある美、美しいもの、それが透き通しになって、その向こうに本当の、永遠の美のイデアが見えてくる。そして究極的には、この美の理念が神と一致してしまう。イスラーム的にいえば、すべての美しいものの奥底に神が見えてくるのです。美の権化であるような神の姿が」（「神の賛美」井筒俊彦）

「どうせこの世は一生かぎり。生きて死ぬ。ただそれだけのこと。『時』がわしらを滅ぼすまでのことなどと彼らは言う。実は、なにもわかってはおらぬ。ただあてずっぽうを言っているだけ。」（コーラン第54章、第23章）

若い頃から、コーランが糾弾する「彼ら」の言葉に魅せられて、ペルシャの詩人に愛着もち続けていた記憶がある。「酒をのもう、天日は吾を滅ぼす/君やわれの魂を奪う/草の上に坐って耀う酒をのもう/どうせ土になったらあまたの草が生える！」。ペルシャの詩人、オマール・ハイヤームの詩句は、自堕落に怠惰を貪っていた私の慰めだったのだが、イスラームの教えからほど遠いことだけは間違いない。イランの方々を相手に葡萄（ぶどう）酒のグラスを空け続けていたら、ふと、そんな由無しごとを思い出してしまった。いくらなんでも、上品にヒジャブを被る知的で奥ゆかしい奥様に、そんな話をするはずもなく、満月の夜空を眺めて、煙草を吸いにいった折に、ふと浮かんだのである。それでも深夜お別れをする時に、礼を忘れ、女性である奥様に握手をしようとしてしまった。

イタリア料理店のご主人と

なんどか訪れているうちに、ラヴェンナでいちばんと言われているイタリア料理屋のご主人とすっかり仲良くなってしまった。ラヴェンナに寄る度に伺うのだが、ご主人は英語をまったく解さないし、私もイタリア語は幼児の片言の域を出ない。そんなことは無視して、ご主人は私がイタリア語を解しているかのようにイタリア語で喋り、同じテーブルで食事をする。後を継ぐご子息が、たまにテーブルに寄ってくれると、仲介をしてくれるのだが、忙しく立働いて、すぐにいなくなってしまう。それでも1年に一度会うとお互いに嬉しいのである。問題はどうしてもお代を取ってくれないことである。押し問答をするのだが、頑として受け取ってくれない。言葉は通じなくとも、ご主人は私の言わんとしている趣旨は十分に理解しているのである。

先週、早朝に羽田に着く便で、日本に帰る。梅雨明けもまだなのに、気温は35度近い酷暑である。湿気も多く、汗がジワリと衣服にまとわりつく。羽田からオフィスに直行し、机に座って、書類等を整理しているうちに、あっという間に海外ことが、記憶から消えてしまう。日常というのは、そんなものである。その代わり、時差が解消するのだけは年々遅くなって、いまだに昼間、眠くなってしまう。せっかく挨拶に訪ねてきていただいた方の前で、話しながら眠っているような状態が続いている。

鈴木幸一　IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
こちらの投稿フォームからご意見をお寄せください。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁

じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.